特別なことよりも

一宮中・1　岸川　くるみ

夏休みの始まり。
「一学期、もう終わっちゃったね。」
私は言った。母も
「そうだね、早いね。」
私たちは最近、同じことばかり話している。ついこの間入学したかと思ったら、もう夏休みに入ってしまった。たくさん思い出があったけど、一瞬だった。そして私は、この夏休みも一瞬で過ぎてしまう気がして、少しどきどきしていた。
気づけば夏休みの半ば。ほらね、私の予想的中。一瞬で過ぎていってしまった。私は一つため息をついた。宿題は順調だったが、一瞬で過ぎていってしまった夏休みだったので何だか物足りなかった。
「お父さん、お母さん、せっかくの夏休みなんだから家族で遊んだり、お出かけしたりしたいよ。」
コロナ禍なので、お出かけはあまりできないと思っていたけど、それでも何か楽しいことがしたかった。すると妹も同じ気持ちだったようで、目をきらきらさせながら
「私、プール行きたい。」
と言い出した。母が少し考えてから、顔をパッと明るくして言った。
「プールはまた今度にしよっか。それよりいいこと思いついちゃった。」
私と妹は顔を見合わせて首をかしげた。
「毎年夏休みは、みんな手伝いしてくれるでしょ。だから今年は家族みんなで、手作りのギョーザを作りましょう。ギョーザなら簡単だよ。」
私は顔をしかめた。なんだか思っていたことと違う。それに、そんなに一気に言われても困る。私が考え込んでいるうちに、父が賛成した。
「家族みんなで作るのも楽しいだろうし、夏休みの思い出にもなるよ。」
父の言っていることは確かに正しかったので、私も賛成した。妹もしぶしぶ賛成してくれた。後日食材をそろえて、お昼ご飯に作ることが決定した。何だか少し違った方向に進んでいる気がするけれど、心の中がぽかぽかしたように思えた。
数日後、やっと食材がそろった。たった二、三日のはずなのに一週間以上待たされた気分だった。なんだかんだ言ったが、私はギョーザ作りを楽しみにしていたのだった。すると母が、
「もうすぐ十一時になるから、そろそろギョーザ作り始めようか。」
そう言ってきたので、さっそく始めることにした。まずは、ギョーザの種作りからだ。豚ひき肉とキャベツ、ニラを混ぜ、そこにニンニク、しょうが、調味料を入れてもう一度混ぜた。豚ひき肉はさっきまで冷蔵庫に入っていたので、混ぜたら少し冷たくて気持ちがよかった。最近は料理の手伝いをしていなかったし、たくさん食材を入れて混ぜたのでかなり疲れた。母が毎日これをやっていると思うと、「お母さん様様だなあ」としみじみ思った。
「あともう少し混ぜたら、種は完成していいよ。」
母から終わりの指示が出たので、私の顔が明るくなった。やっと終わる。すると、
「私も混ぜる。」
そう言って妹の手がボウルの中に突っ込んできた。私の手と妹の手でボウルがいっぱいになり、具材が少しあふれた。私が妹を軽くにらみつけると、妹は身を縮ませて謝った。ギョーザ作りをする前はあまり乗り気ではなかった妹も今はとても楽し気にしている。妹も私と同じでギョーザ作りを楽しみにしていたようだ。だから、ボ

ウルのことはすぐに許して二人で具材を混ぜた。
「うん、オッケー。じゃあ、次は皮で包んでいこうか。」
「もう、疲れた。次は皮で包むの。」
足取り重く二人で父の座るリビング机へ向かった。机の上には、皮が広げて準備されていた。「お父さんはこっちの準備をしてたんだな」と感心していると、
「ギョーザの種の到着です。」
母がボウルを机に持ってきた。それからは笑いあり、涙なし、そして笑顔ありのパラダイス。
「お父さん、変な形作るね。」
「だって、全部同じじゃつまらないでしょ。」
私と父が話し合いながら皮で種を包んでいく。父は少し変わっている。なぜならギョーザをシューマイやどらやきなどの形にして包むからだ。それを見て、妹もケラケラ笑いながら言った。
「じゃあ、私は四角くて平らなギョーザを作る。」
すべて包み終わり、ホットプレートにギョーザを並べ、水を入れて蒸す。完成はもうすぐ。数分後、いい匂い。「ついに完成かな」ホットプレートのふたを開けると白いゆげが目の前に広がった。すごく熱かったけど、なんだか嬉しくて、安心した気分になった。
「わあ。」
家族みんなで歓声をあげた。こげ目のついた個性豊かなギョーザたち。ホットプレートいっぱいにつめこまれて、押したり押されたり、おしくらまんじゅうしているみたい。のぞいていた私たちまで温かい気持ちになる。さあ、とうとうお待ちかね。
「みんなお皿によそいましたか。」
母の合図で家族全員首をたてに振る。
「それでは、いただきます。」
「いただきます。」
まだ熱々のギョーザは、とてもおいしかった。家族の温もりを口の中で噛みしめた。みんなで心を込めて作ったギョーザは、今まで一番だった。
「おいしい。」
「おいしいね。」
みんな口々に言った。家族から笑顔があふれた。どこかに出かけなくても、特別楽しいことをしなくても、家族みんなが笑顔で楽しい気持ちになれた。夏休みのすてきな思い出になった。
昨日も一瞬で過ぎていった。今日も一瞬で過ぎていく気がする。楽しくて充実した日は、一瞬で過ぎていく。また来年も、家族で手作りのお昼ご飯を作りたい。充実した楽しい夏休みが送れるように。夏休みのすてきな思い出が作れるように。

９・２６